

仙台市文化財調査報告書第119集

泉崎浦遺跡

—発掘調査報告書—

1988・3

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第119集

泉崎浦遺跡

—発掘調査報告書—

1988・3

仙台市教育委員会

序

日頃、仙台市の文化財保護行政に対しまして、多大の御協力をいただき、担当する仙台市教育委員会にとりましては、誠に感謝にたえません。

近年、富沢地区周辺におきましては、区画整理事業の完了、高速鉄道（地下鉄）の開通により、環境が大きく変わり、仙台市南部の拠点となる副都心として、急速に開発、市街化が進んでいるところであります。こうした動きの中で、開発に伴なう発掘調査が頻繁に行なわれ、毎年先人の生活文化の様相が解明されつつあるところであります。その反面、遺跡の保存に関する諸々の問題が露呈していることも事実であり、文化財保護の課題となっていることも否めないところであります。

さて、この度発掘調査いたしました、泉崎浦遺跡一帯は、周囲が水田という中で古くから集落が営まれていた地域であります。調査は宮城県教育委員会文化財保護課の御協力によりまして、古代においても集落が営まれていた地域であるという痕跡の一端が明らかになりました。また、富沢地区において最も古い時期に属すると考えられる水田跡が検出され、泉崎浦遺跡を解明するための一助となる成果が得られました。こうした文化遺産を市民の宝として永く後世に継承していくことは、これから「まちづくり」に欠かせない大切なことであります。今後とも市民各位の絶大な御協力を念願して序といたします。

昭和63年3月

仙台市教育委員会

教育長 藤井 黎

例　　言

1. 本書は共同住宅（マンション）建築工事に伴う泉崎浦遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査の主体者は仙台市教育委員会であるが、発掘調査にあたって宮城県教育庁文化財保護課の応援をいただいた（担当職員　真山悟）。
3. 調査に際して、山田一郎（東北大学、土壤学）、豊島正幸（東北大学、地質学）、杉山真二（古環境研究所、プラントオパール分析）諸氏の御教授、御協力をいただいた。
4. 貝層検出ピット2の柱材の樹種に関して、パリノサーベイ（株）高橋利彦氏に御教授をいただいた。
5. 本書の文章、実測図中の方位は真北に統一してある。
6. 造構平面図中に任意に単点を設けて標高を明示するようにしてある。
7. 本書に掲載した第2図は国土地理院発行の2万5千分の1「仙台東南部」「仙台西南部」を使用したものである。
8. 本書中の土色は「新版標準土色帖」（小山、竹原：1973）を使用した。
9. 報告書作成のための整理は主浜光朗が担当し、本文執筆はIを佐藤隆が、VII-(5)石器を斎野裕彦が、他は主浜が行ない、編集は主浜が行なった。
10. 本調査における出土遺物、実測図、写真等の資料は、仙台市教育委員会で一括保管しているので活用されたい。

本文目次

序

例言

I. 発掘調査に至る経過	1
II. 調査要項	1
III. 遺跡の位置と環境	3
IV. 調査の方法と経過	5
V. 基本層位	6
VI. 検出遺構と出土遺物	7
(1) III層検出遺構と出土遺物	9
(2) IV・V層検出遺構と出土遺物	12
(3) VI層検出遺構と出土遺物	17
(4) VII層検出遺構	19
(5) VII b 層検出遺構と出土遺物	20
VII. 寄察とまとめ	24
1. 出土遺物	24
2. 検出遺構	25
3. まとめ	27
付章・泉崎浦遺跡土壤のプラント・オパール分析	29

I. 発掘調査に至る経過

仙台市南部の富沢地区において、昭和55年より仙台市体育馆や高速鉄道（地下鉄）建設工事に係る埋蔵文化財の発掘調査が実施された。その結果、それまで確認されていた泉崎浦遺跡や山口遺跡以外の弥生時代から近世までの水田遺構が確認され、昭和58年6月、富沢水田遺跡、（仙台市登録C-301）として仙台市教育委員会は周知した。その後、発掘調査が進み、水田遺構の下層から縄文時代の遺物包含層も検出され、昭和61年9月、富沢水田遺跡を富沢遺跡と改称した。昭和62年度末において、34次の発掘調査がなされ多くの成果をあげている。

今回の発掘調査は、昭和62年4月13日、株式会社・大京より、仙台市泉崎一丁目19番8他において、マンションの建設に係る発掘届が提出されたので、仙台市教育委員会は、株式会社・大京と協議を重ね、昭和62年10月より仙台市教育委員会が発掘調査を実施することとした。今回の発掘調査は、泉崎浦遺跡内ではあるが、富沢遺跡の内容をも含むことが十分考えられるので、それをも想定した発掘調査をとることとした。

II. 調査要項

遺跡名称 : 泉崎浦遺跡（仙台市文化財登録番号C-202、宮城県遺跡登録番号01285）

所在地 : 仙台市泉崎一丁目19-8~10

調査主体 : 仙台市教育委員会

調査担当 : 仙台市教育委員会文化財課調査係

（担当職員：上浜光朗）

調査期間 : 自1987年10月26日 至1987年11月30日

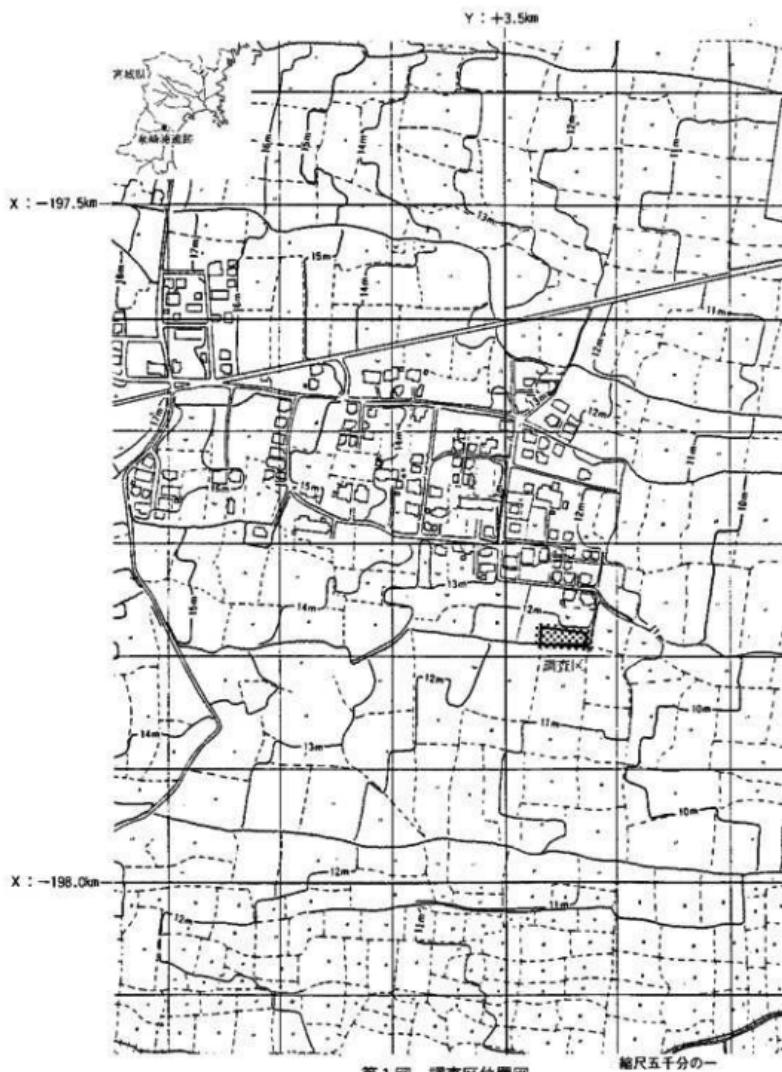
調査対象面積：約 974m²（発掘面積 約 564m²）

調査参加者 : 大槻明美、小沼ちえ子、佐藤敏幸、佐野弘（以上整理も含む）

赤川千広、阿部いしよ、阿部幸一、阿部清太郎、阿部すえ子、阿部美代寿、阿部みのる、老岐豊子、岩井レイ子、小川良子、黒田ふき子、今野淑子、篠川光夫、齊藤とき子、佐藤幸子、菅井君子、菅井妙子、鈴木つや子、鈴木よしゑ、高橋とみ子、高山宣子、畠田美由紀、早坂みつえ、森節子

郡山和彦、庄子錦一郎、根本辰江（整理のみ）

調査協力 : 株式会社大京、大林組仙台工事事務所



III. 遺跡の位置と環境

泉崎浦遺跡は、東北本線長町駅より南西約1.5kmの地点、仙台市泉崎一丁目地内に所在する。本遺跡の南方約1.6kmには名取川が、北東約1.7kmには大年寺山が望める所である。遺跡の範囲は東西約300m、南北約150mで、面積はおよそ45,000m²と推定される。

遺跡周辺の地形を概観すると、西側に南北に連なる奥羽山脈と、その東麓から派生する陸前丘陵、さらに東方に宮城野海岸平野が広がっている。仙台市付近では陸前丘陵を広瀬川と名取川が東流しており、その河間丘陵を青葉山丘陵（最高標高212m）、広瀬川以北を七北田丘陵（標高500m前後）、名取川以南を高館丘陵（標高200m前後）と呼んでいる。広瀬・名取両河川は中流域に、下刻作用により4～5段の段丘地形を発達させており、丘陵を貢流した後、沖積作用により宮城野海岸平野を形成している。宮城野海岸平野は、地理的条件などから、いくつかに地形区分されており、仙台市南部の広瀬川と名取川の合流点付近では、河間低地を郡山低地、広瀬川以北を渡ノ目低地、名取川以南を名取低地と分けている。

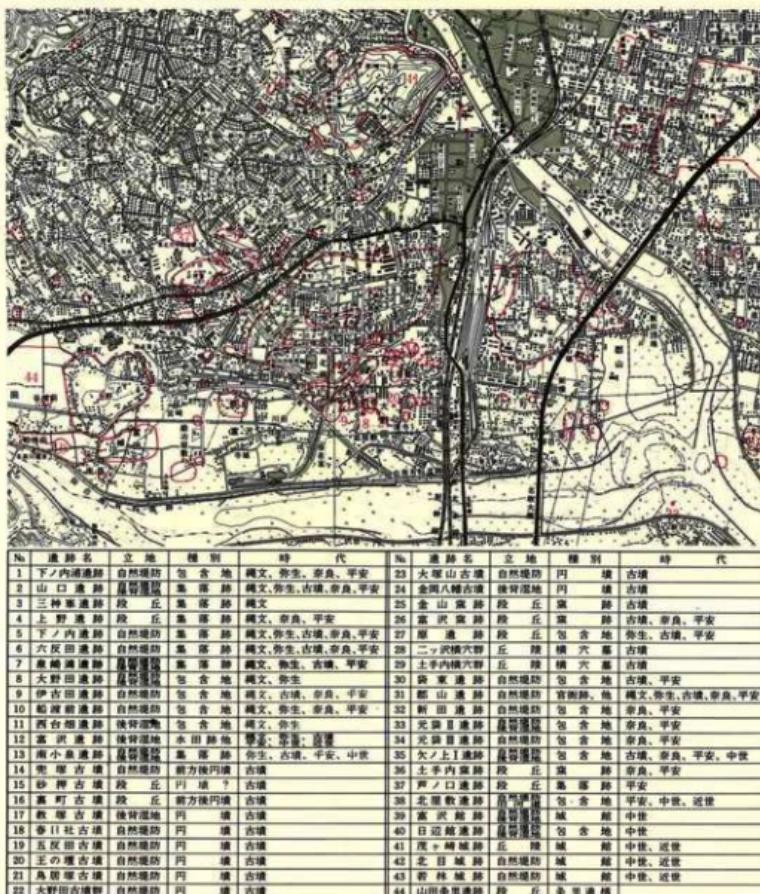
遺跡の所在する宮沢地区は、宮城野海岸平野の中でも郡山低地に所属する。郡山低地は、北東縁と南縁を広瀬川と名取川によって画され、北西縁には長町一利府線が走り、青葉山丘陵と名取台地に接している。標高は約7～20mである。また、広瀬川と名取川両河川沿いに自然堤防が良好に発達している他、その中央部を南北に走る自然堤防もみられる。そして、自然堤防の背後には後背湿地が広がっている。富沢地区は、郡山低地西半部の自然堤防と後背湿地に立地する。この地域は北方、南方、東方を自然堤防に囲まれた後背湿地であり、南部に名取川の支流である笊川が曲流している。また、中央部には西方の丘陵より微高地が東に延びている。微高地は小規模な扇状地の末端部である。本遺跡は、その後背湿地とその中にあらわる微高地にまたがって立地している。

富沢地区及びその周辺には数多くの遺跡が分布しており、仙台市内でも考古学的調査が比較的多く行なわれている地域である。これまでの調査により各時代の様相が次第に解明されてきている。縄文時代では、下ノ内浦遺跡より早期前葉の遺構と遺物が検出されており、既にこの時期には人間生活の場となっていたことが明らかになっている。また、中期中葉以降には、自然堤防上に立地する六反田遺跡、下ノ内浦遺跡、下ノ内浦遺跡、伊古山遺跡等に居住域及び墓地等が形成される。この自然堤防上の地域は居住域として後世に連続している。弥生時代には、広大な後背湿地に立地する富沢遺跡から、水田跡が検出されている。また、下ノ内浦遺跡から、墓塚や窓穴造構が検出されている。これらに伴なう集落遺跡は明らかではないが、後背湿地周辺の自然堤防上や段丘縁辺部に存在すると考えられている。古墳時代では、富沢遺跡から水田跡が検出されている他、六反田遺跡、下ノ内浦遺跡等の集落跡が検出され、裏町古墳や教塚古墳、

大野田古墳等の古墳も数多く存在する。奈良・平安時代になると、山口遺跡で水田跡と居住域が、富沢遺跡で水田跡、下ノ内遺跡、六反田遺跡、下ノ内浦遺跡、元袋Ⅲ遺跡等で集落跡が検出されている。また、富沢遺跡では中・近世まで水田が営まれており、中世では自然堤防上に富沢館跡があり、近世では丘陵上に茂ヶ崎城跡等がみられる。以上のように富沢地区周辺には縄文時代早期から現代に至るまで、連続と人間の生活の痕跡が残されている。

引用参考文献

- 斎野裕彦 他：『仙台平野の遺跡群Ⅲ』（1984）仙台市教育委員会
 田中則和 他：『六反田遺跡発掘調査報告書』（1981）仙台市教育委員会
 篠原信彦 他：『仙台市高速鉄道関係遺跡調査報告書Ⅰ～Ⅵ』（1982～1987）仙台市教育委員会
 田中則和 他：『山口遺跡Ⅱ』（1984）仙台市教育委員会



第2図 泉崎浦遺跡と周辺の遺跡・地名表

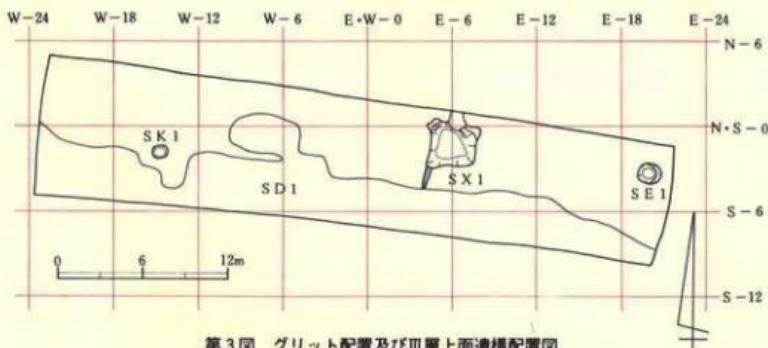
IV. 調査の方法と経過

調査対象面積は約 974m²である。発掘区は調査時の堆土を調査地区外に運び出すこととして、建物の建設部分の盛土が堆土されていた部分約 564m²に設定した。

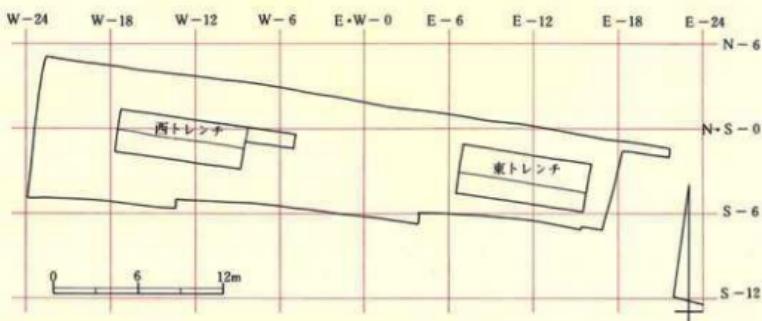
旧水田耕作土の深度及び土層確認、排水のための側溝を掘ったところ、更に約80cmの盛土が確認された。このため重機で盛土及び旧水田耕作土を排除し、その後、人力によって遺構確認作業を行なった。

Ⅲ層上面で、水路及び井戸跡、土壤等が検出された。この水路は区画整理により盛土される以前まで使用されていた水路の一部であることが確認された。Ⅳ層及びV層は古墳時代の遺物包含層であり、VI層上面でピットが検出された。

また、Ⅲ層及びVI層は砂層及び水成堆積層であり、層厚が厚かったため重機で堆土した。Ⅶ層上面で畦畔状の高まりを検出した。Ⅷb層上面では弥生時代の畦畔が検出された。Ⅷc層以



第3図 グリッド配置及びⅢ層上面遺構配置図



第4図 トレンチ配置図

下では造構、遺物は検出されなかった。

調査中国家座標の任意の点（国家座標系第Y系、Y=+3,550km、X=-197,780km）を原点として、真南北線を縦軸に、真東西線を横軸に 6m×6m のグリッドを設定した。

造構測量の際、平板測量を用い縮尺1/500の平面図を作成した。土壌断面図に関しては縮尺1/500を用いた。

水田が予想されたⅩ層上面まで全面の精査を行ない、以下の層は東、西 2ヶ所の深掘り区を設定して掘り下げた。

V. 基本層位

基本層位は盛上以前の水田耕作土のⅠ層よりⅪ層までの大別27層確認された。これらはさらに36層に細別される。しかし今回の調査では基盤となる砂礫層までの確認はできなかった。

Ⅰ、Ⅱ層は旧水田耕作土、Ⅲ層は砂層で、上面で灰白色火山灰が検出されている。調査区西側に向って厚く堆積している。Ⅳ、Ⅴ層は黒褐色系の砂質シルト～シルト層で、調査区西側で土手状の盛り上がりを形成している。Ⅵ層は、水成堆積層で、シルトと砂の互層となっており、調査区東側に向かって厚く堆積している。

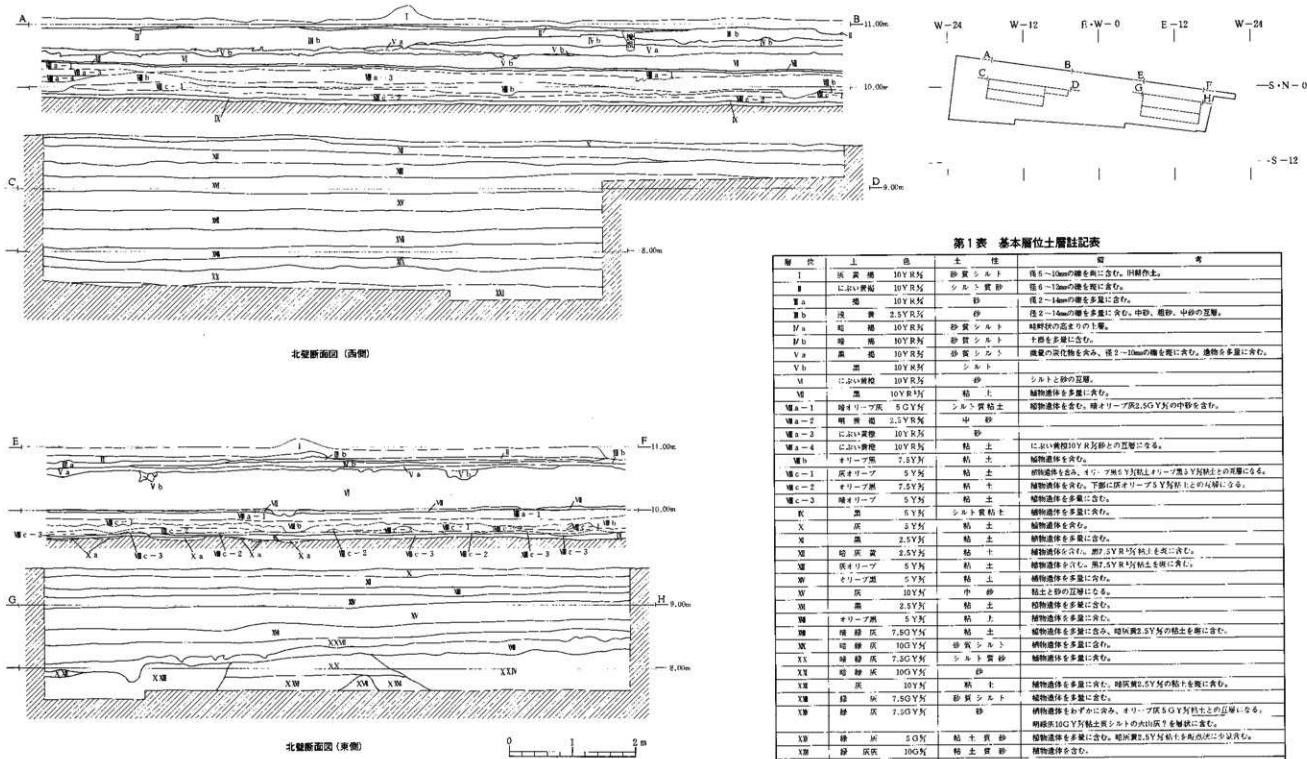
また、調査区の東側では、厚い砂層が挟まれ、層厚が増している。Ⅷ層は、黒色粘土層で未分解の植物遺体を含んでいる。Ⅸ層はさらに6層に細分される。Ⅹa層は西側では下部に砂層がみられ、調査区中央部分のⅩb層の畦畔を境にして、東側は泥炭層と砂層の互層状態になる。Ⅹb層は水田土壤である。Ⅹc層は泥炭層と砂層の互層状態を示しているが、部分的に泥炭の分解が進んだ状況を示す。Ⅺ層は黒色のシルト質粘土層である。X層にも泥炭の分解が進んだ状況を示す部分がみられる。Ⅻ層～Ⅿ層までは黒～灰色の泥炭層と砂層であり、Ⅿ層以下はグライした粘土層及び砂層である。Ⅿ層～Ⅾ層までは砂層であり、河川あるいは溝状の落込みの堆積土である。

また、Ⅿ層にはレンズ状に火山灰が堆積している。Ⅿ層以下は堅くしまった粘土層である。

VI. 検出造構と出土遺物

今回の調査で検出された造構は、Ⅲ層上面で水路、土壙、井戸跡等があり、Ⅳ、Ⅴ層上面で土手状造構と畦畔状造構がある。また、Ⅳ、Ⅴ層は遺物包含層を形成している。Ⅵ層上面でピット及びⅨ層上面、Ⅹb層上面で畦畔状造構が検出されている。

遺物は整理用平箱（テンパコ32）にして4箱程の出土量である。弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、石製品、木製品などがある。（このうちⅢ層上面検出水路は、区画整理以前まで使用されていたものであることが判明したため、記述から除いた。）



第5図 調査区基本層位（北壁断面図）

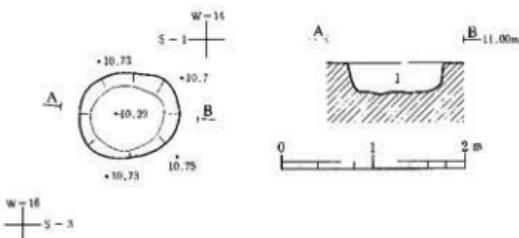
(1) III層上面検出遺構と出土遺物

III層上面では、土壤1基、井戸跡1基、竪穴遺構1基が検出された。

SK-1 土壙

調査区西寄りのW-15、S-2付近に位置し、他の遺構との重複関係は見られない。平面形は、長軸1.1m、短軸0.93mの楕円形を呈している。堆積土は単層である。號はIII、IV層から成り、33cmの高さがある。底面から急角度で立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

遺物の出土はなく、土壤の性格を特定できる資料は得られなかった。



SK-1 堆積土土層註記表

層名	土色	土性	備考
1 黒褐色	2.5YR 5/2	砂	黒褐色2.5YR 5/2の粘土層を含む。

第6図 SK-1 土壙

SE-1 井戸跡

調査区東隅のE-20、S-3～4付近に位置し、他の遺構との重複関係は見られない。平面形は、長軸1.68m、短軸1.50mのほぼ円形を呈する。堆積土は4層に大別され、2層、3層には植物遺体を多く含む。號はIII層～IV層から成り、165cmの高さがある。底面からほぼ垂直に立ち上がる。東側では、中位に段がみられ上位が崩落したものと思われる。

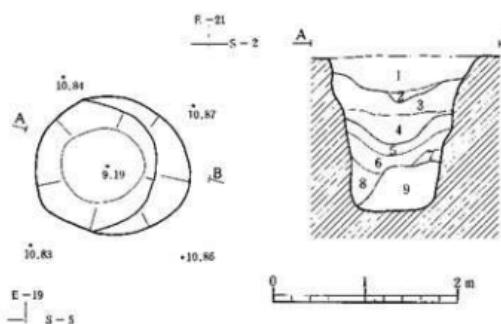
中段付近では径約130cmの円形を呈している。底部は平坦である。内部に井戸枠及びその痕跡は確認されず、素掘りのものである。

(出土遺物)

遺物は3層から手桶が分解した形で出土している。底径20.0cm、上径22.4cm、高さ16.5cm、把手部分の高さ19.7cm、把手の横木は残存長23.5cm、最も太い部分で2.5cm×2.0cmの長方形の断面を呈する。4面に面取りがある。底板は2枚残存しており、厚さは1.4cm～1.7cmある。いずれも木釘穴が2個ずつあり、それぞれに木釘が残っている。この桶は水汲み用の手桶であると思われる。

その他に、図示はしていないが桶の底板と考えられる木製品及び若干の土器片が出土している。

第2表
SE-1井戸跡出土
土器破片資料

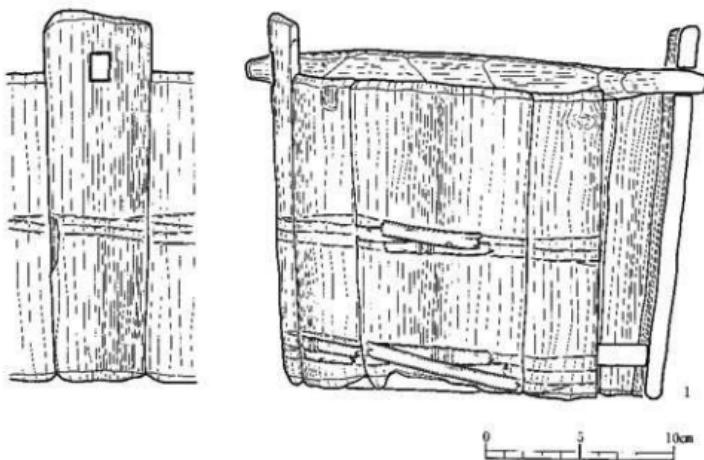


上部器	種類	部位
外	マメツ	面
内	マメツ	面
堆積土	2	
合計	2	

SE-1 堆積土層記表

層位	層番	土 色	土 性	相 状
1	1	灰 黄褐色	10YR 5/6	シルト質 地 淡白2.5Y 6/6の砂を細粒に含む。1層下古材遺物を多く含む。
	2	灰 黄褐色	10YR 5/6	砂質シルト 径5~10mmの小礫を多量含む。
2	3	黄褐色	2.5Y 5/6	砂 地際に網状構造を多く含む。
	4	暗オリーブ灰	2.5Y 5/6	砂 地 砂質シルト 地表、本層片を多く含む。
3	5	黄褐色	2.5Y 5/6	砂質シルト 地表、炭化物を含む。
	6	オリーブ灰	5 Y 5/6	砂質シルト 多量の砂を含む。砂、木片を含む。
3	7	灰褐色	10Y R 5/6	水素灰、にじい黄2.5Y 5/6地土塊を含む。
	8	灰褐色	5 Y 5/6	木片、砂を含む。
4	9	暗オリーブ灰	2.5Y 5/6	砂質シルト、細砂 木葉灰、小礫含む。粘土塊を多量に含む。

第7図 SE-1井戸跡

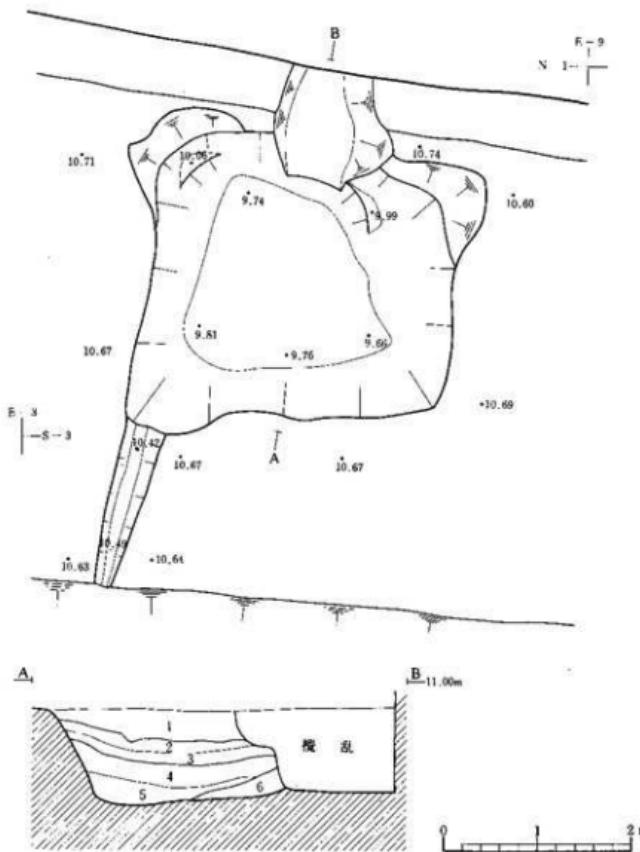


番号	層位	種類	木 取り	圖 紙
1	3	手 棚	例 例 伍 日 例 例 伍 日	例 例 伍 日 例 例 伍 日

第8図 SE-1井戸跡出土木製品

S X - 1 穴道構

調査区中央部 E - 5 ~ E - 7、N - 1 ~ S - 3 に位置し、北壁の中央部分は擾乱に切られている。平面形は東西 3.4m、南北 3 m の方形を呈する。北東及び北西コーナー付近に崩落の痕



S X - 1 堆積土土層記表

層位	層名	土色	土性	備考
1	1	暗 褐	10YR 5/4	シルト質砂 微量に炭化物を含む。
2	2	黒 褐	10YR 3/4	粘土質シルト
3	3	風 褐	10YR 4/4	粘土質シルト 植物組織を含む。
4	4	暗 褐	7.5YR 4/4	砂質シルト 砂とシルトの互層(水成堆積)植物組織を多量に含む。
5	5	黒 褐	10YR 5/4	砂質シルト 砂とシルトの互層(水成堆積)。
6	6	暗灰 褐	2.5YR 4/4	シルト質砂

第 9 図 S X - 1 穴道構

跡がみられる。南西コーナーから南方へ幅40~18cmの溝状に張り出す部分がある。先端は水路に切られている。堆積土は4層に大別され、2層、3層には植物遺体が多量に含まれている。

壁はⅢ層~Ⅳ層から成り、底面から急角度で立ち上がるが、北東部では傾斜が緩やかになっている。

また、北東及び北西コーナー付近では中位に段がみられる。底面はほぼ平坦である。この構造の性格は不明であるが、1層出土の土器に水路から出土した破片が接合しており、南側の溝状の部分が水路に切られていることから、水路と何らかの関連があるものと考えられる。

(出土遺物)

遺物は1層からではあるが、土師質土器が1点出土している。杏核形のものであり、3個の脚がつけられている。底径9.2cm、口径10.8cm、器高6.1cmで脚の高さ1.25cmである。体部外面に二本の平行沈線とその間に施された連続した格子状の押型による文様帶がみられる。底部は体部との境部分を回転ヘラケズリし、脚部を貼り付けた後に中央部分を手持ちヘラケズリしている。口縁部の一部に油脂の付着した部分も見られる。年代、用途については不明である。



第3表
SX-1整穴構
出土土器破片資料

土器種類 部位	土器面			合計
	外 面	内 面	裏 面	
外 面	マ メ ツ	マ メ ツ	マ メ ツ	計
内 面	ナ ダ	マ メ	マ メ ツ	
1層	1	1		2
2層			1	1
合計	1	1	1	3

層位	種類	面			備考
		外 面	内 面	裏 面	
1層	土師質土器 沈線、押型、ミガキ、クロロテグ	回転ヘラケズリ、手持ちヘラケズリ	脚部凹凸	手持ちヘラケズリ	SX-1上接合

第10図 SX-1整穴構出土土器

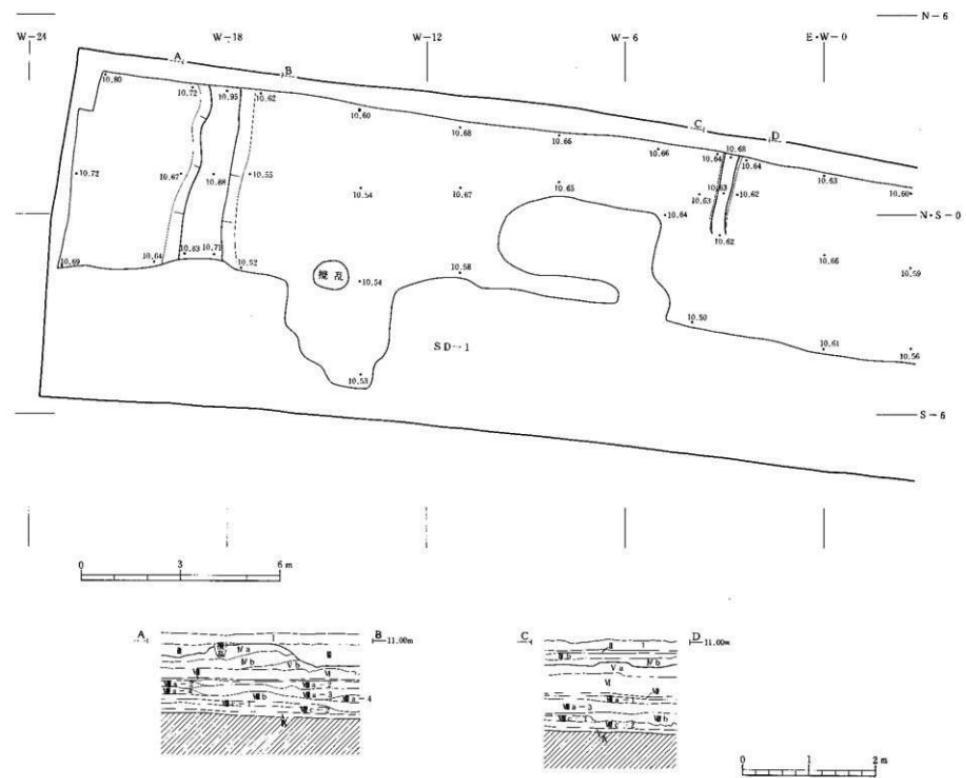
(2) IV、V層検出構造と出土遺物

IV、V層上面では土手状構造、畦畔状構造が検出されている。また、IV、V層自体が遺物包含層を形成している。

土手状構造

調査区西寄り、W-18ラインで土手状の盛り上がりが検出された。北側の調査区外に延びている。長さ6m、下端幅1.6m~2.2m、上端幅0.85m~1.3m、高さは東側で20~35cm、西側で12cm~20cm、方向はN-8°-Eである。南側を水路で切られている。

IV層及びV層は遺物包含層であり、水川土壤とは考えられず、水田に伴う畦畔とは考え難い。性格は不明であるが、IV層が東側へ広がっていたものが、III層堆積の際に削平を受け、土手状に残存したという可能性もある。



第11図 V層土手状造構

畦畔状遺構

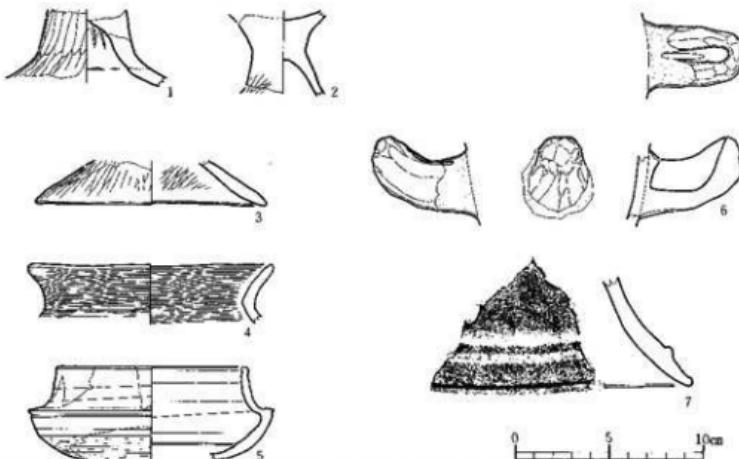
調査区中央部W-1ラインで検出された。長さ3m、北側の調査区外に延びている。下端幅50cm、上端幅35cm~42cm、高さ最高5cm、方向はN-12°-Eである。上手状遺構と同様に水田に伴う畦畔とは考え難く、性格は不明である。

以上の七手状遺構、畦畔状遺構の他にIV、V層上面において、調査区西側を中心に足跡状の痕跡が多数確認された。III層上面において渦巻状の不定形のプランがみられたが、曖昧で明確なプランとして把えられなかったものが明確な形で確認されたものと思われる。足跡状の痕跡の堆積土は砂あるいは砂粒を含む砂質シルトである。形態は円形、楕円形、「こ」字状のもの、その他不定形のものや渦巻き状のものがある。規模は10cm前後のものが多い。これらについては重複が多く方向性等については看取できなかった。そのため図示はしていない。

円形、楕円形、「こ」字状のものについては形態や大きさから牛の足痕と考えられ、その他のものについては不明であるが人の足跡の可能性もある。

遺物包含層

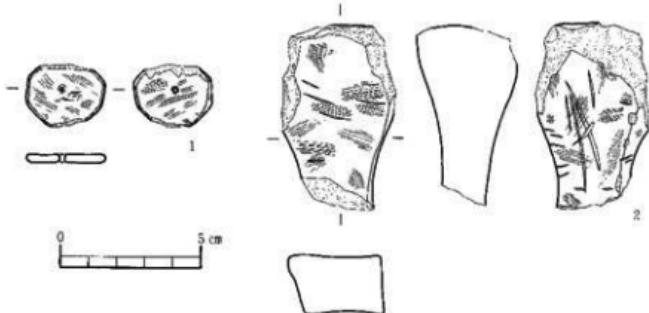
IV層、V層は遺物包含層である。IV、V層は調査区のほぼ全域に堆積しているが、南東側へ緩やかに傾斜している。土師器、須恵器、石器類が出上している。



No.	層位	種類	調 型		備 考
			外 面	内 面	
1	Ⅳ～V	土師器 高脚	ミガキ	ミクニ	
2	Ⅳ～V	土師器 高脚?	ミガキ	マツメ	大下がマツメ
3	Ⅳ	土師器 高脚?	ミガキ	ミガキ	
4	V	土師器 瓢	ヨコナデ	ヨコナデ	
5	V	須恵器 筋	ワケワナダ、回転ヘラナダ?	ロクロナダ、ナダ	
6	V	須恵器 鉢? 扁平	ナツシケ	ナダ	
7	Ⅳ～V	須恵器 瓢	ロクロナダ、麻輪	ロクロナダ	

第12図 遺物包含層出土土器

土器片のほとんどは磨小片であり、図示できた資料は僅かに、土師器4点、須恵器3点、石製品2点のみである。第12図1～3は高环の脚部である。1、2は柱状部で、円錐形を呈し、1は直線的に裾部に開いており、2はふくらみをもっている。3は裾部で円錐形に直線的に開いている。いずれも円窓は確認できなかった。器面調整は磨滅が著しいが、外向はハラミガキであり、内面は、オサエメ・ハラミガキが観察される。4は甕の口縁部である。外反しており、器面調整は外向、内面ともに横ナデである。5は环である。口縁部は内反し、受け部は短かく水平である。口縁部は受け部よりかなり高い。体部は浅く、底部は欠けているが丸底になると想われる。外向の体下部は回転ヘラケズリされている。内面体下部は指によるナテの痕跡がみられる。6は把手である。全体に丸味をもち、上向きに貼り付けられている。上側が沈線状に抉られている。全体にナテツケがみられる。7は脚部と思われる破片である。一条の陰線が巡っている。内、外向ともロクロ調整である。第13図1は石製模造品の有孔円盤である。一部欠損している。中央部に貫通孔がある。孔は一方向から穿孔されたもので、径0.2cmである。表



種別	種類	層位	石			陶			合計
			有孔	内輪	外輪	無孔	内輪	外輪	
1	有孔	内輪	有孔	(23.2) × 2.6	× 0.5	無孔	内輪	外輪	
2	無孔	外輪	無孔	(6.7) × 4.1	× 3.6	無孔	無孔	無孔	

第12図 遺物包含層出土石製品

第4表 遺物包含層出土土器破片資料

種別	土器												合計								
	輪			腹			底			側面											
部位	外	内	外	内	外	内	外	内	外	内	外	内	外								
外 面	ミシマハナマツマ タキツキツツツツ タキツキツツツツ	マツマツマツマツ マツマツマツマツ マツマツマツマツ	ハナマツマツマツ ハナマツマツマツ ハナマツマツマツ																		
内 面	ミシマハナマツマ タキツキツツツツ タキツキツツツツ	マツマツマツマツ マツマツマツマツ マツマツマツマツ																			
合計	4	3	3	4	16	3	2	1	1	3	9	10	1	31	10	1	2	1	277		
E-1号	4	3	3	10	4	7	63	1	2	3	3	4	10	1	3	3	2	69	1	12	394
合計	4	3	1	9	12	15	26	1	2	1	2	3	31	1	2	1	1	36	1	3	903
平均	4	4	10	1	21	20	35	35	3	3	3	7	56	1	4	1	1	32	1	6	1578
合計	8	4	10	1	21	20	35	35	3	3	3	7	56	1	4	1	1	32	1	6	1578

裏両面及び側面は研磨されており、擦痕がみられる。2は砥石である。砥面は皿状に凹んでおり、研磨溝がみられる。その他の出土器については破片集計表に示した。

(3) VI層検出造構と出土遺物

VI層上面でピットが3個検出されている。

ピット1

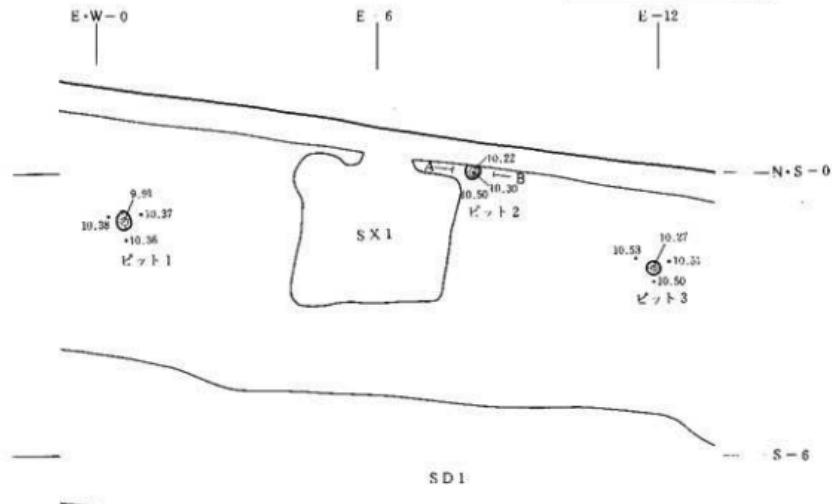
調査区中央部E-0、S-1付近で検出された。42cm×30cmの横円形で確認面からの深さは47cmである。掘り方と柱痕跡の区別はできなかった。堆積土は黒色(10YR 5/6)粘土質シルトの単層である。土器片、礫が出土しているが磨小片のため図示資料はない。

ピット2

調査区の中央やや東寄りE-8、N-0付近で検出された。側溝

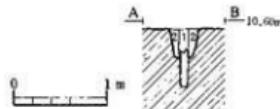
第5表
6層上面ピット1出土
土器破片資料

種別	上 部 間			合
	外	内	壁	
外	マ マ メ メ ツ ツ	横 橫 ナ ナ デ デ	マ ハ メ ケ ツ テ	マ ハ メ ケ ツ テ
内	-	ナ ナ デ デ ツ ツ	マ マ メ ケ ツ テ	マ ハ メ ケ ツ テ
壁	2 2	1 1 1	1 1 3	12
合計	2 2	1 1 1	1 1 3	12



部位	割合	土 型	土 性	標 名
柱痕跡	1	灰褐色	5YR 5/6	シルト
掘り方堆土	2	黄褐色	2.5Y 3/6	シルト質粘土

ピット2堆積土土層計測表



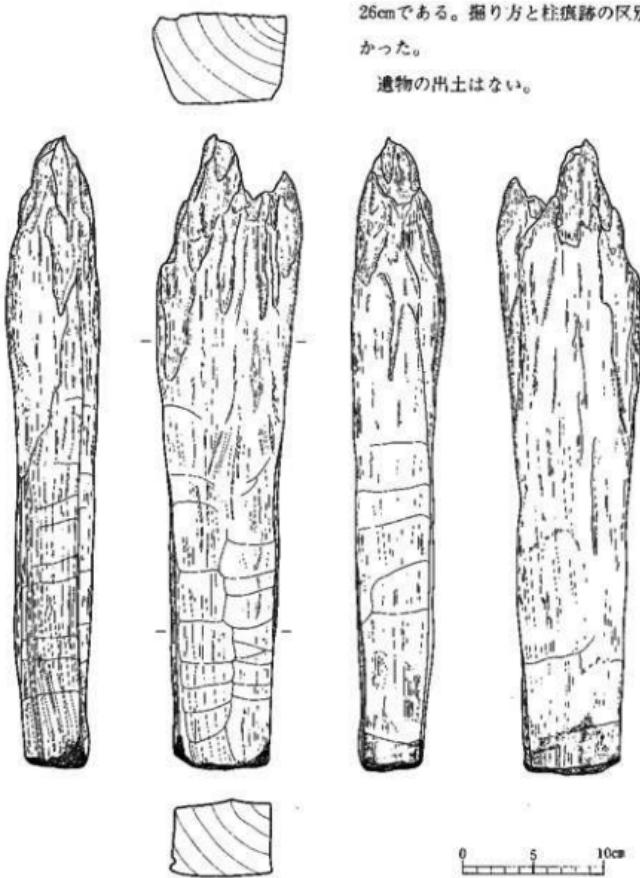
第14図 VI層上面検出造構

により一部削平されているが、32cm×(28)cmのほぼ円形で確認面からの深さは31cmである。掘り方と柱痕跡が区別され、掘り方底面近くでは柱材が遺存していた。柱材は断面長方形の角材で、下端部は6.8cm×4.3cm、上端部では9.9cm×6.5cm、長さ44.9cmで上部にいくに従つて太くなっている。下端部は焼け焦げており、四面には手斧によるものと思われる加工の痕跡が明瞭に残っている。樹種は広葉樹の「クリ」である。残存状況からみると先端部分のみ四面を加工し、地上部については丸太状の柱材であった可能性もある。

ピット3

調査区東寄りE-12、S-2付近で検出された。30cm×28cmの円形で、確認面からの深さは26cmである。掘り方と柱痕跡の区別はつかなかつた。

遺物の出土はない。



第15図 VI層上面ピット2出土柱材

以上のピットの配置に規則性はみられず、柱痕跡が確認されたものも1個のみである。

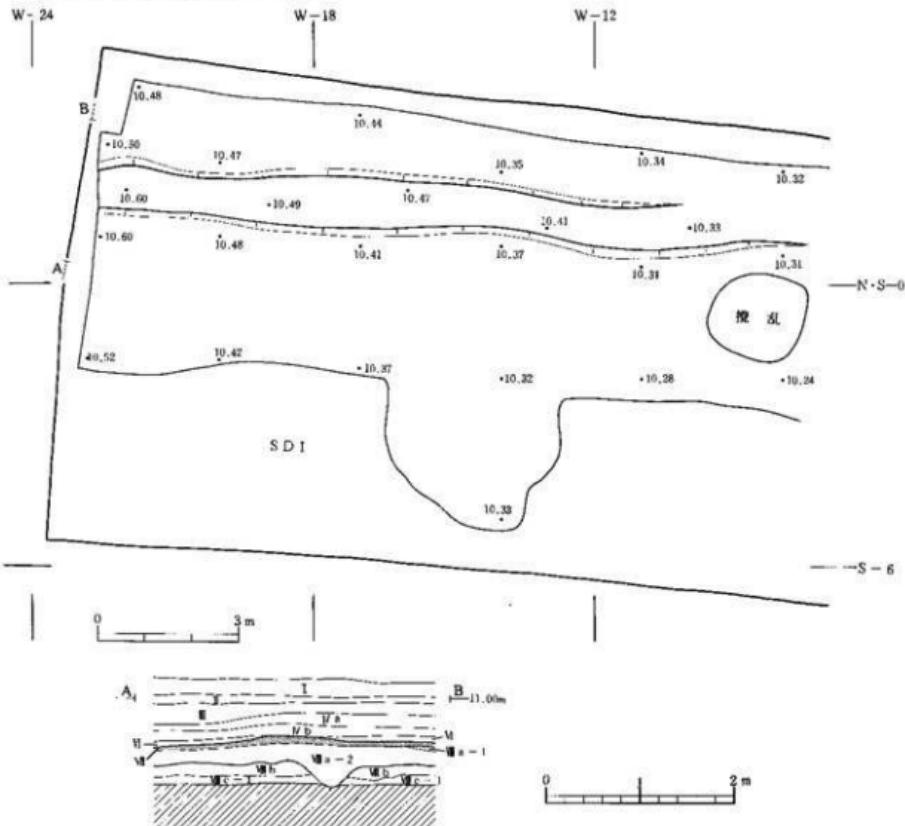
ピット2は掘立柱建物跡の一部である可能性があるが詳細は不明である。

(4) VII層検出遺構

畦畔状遺構

調査区西側N-1～2ラインで検出された。西側の調査区外へ延びている。上端幅75cm～110cm、下端幅100cm～145cm、高さは最高6.5cm、方向はW-4°～Nである。

僅か1条のみの検出であり、区画も不明である。水田の一部である可能性もあるが詳細は不明である。遺物は出土しなかった。



第16図 VII層畦畔状遺構

(5) VII b 層検出遺構と出土遺構

水田跡

調査区中央部及び東隅で畦畔が検出された。水田1枚の面積、形状等の詳細は不明である。調査区中央部の畦畔は、上端幅135cm~192cm、下端幅167cm~250cm、高さ10cm前後、方向はN-52°-Eである。規模から見て大畦であると思われる。北東部に小畦が一部分検出された。上端幅約70cm、下端幅約100cm、高さ7cm前後、方向はE-33°-Sである。調査区東隅の畦畔は調査区に一部かかっているのみである。幅は不明であるが、高さは10cm前後、方向はE-44°-Sである。大畦と思われる。

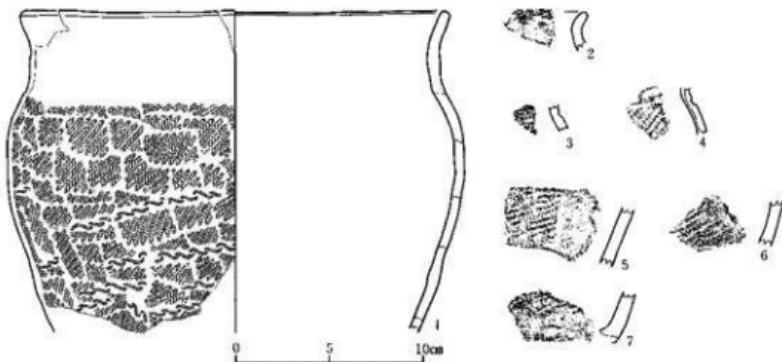
また水路、水口、杭列など水田に関連する施設は検出されていない。また水田としての耕作域の広がりも確認できなかった。

(出土遺物)

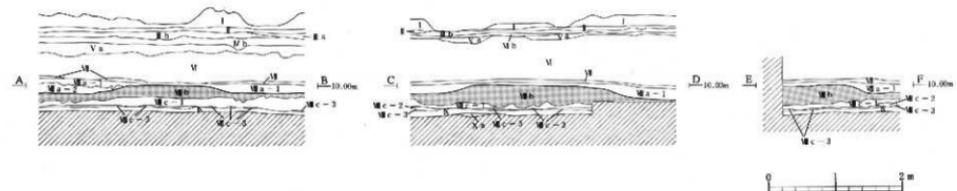
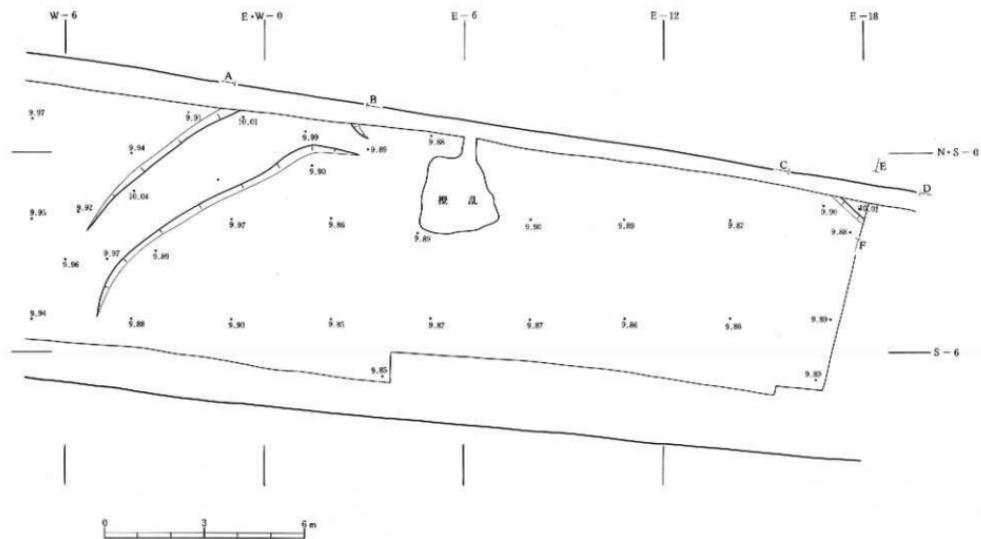
第6表 VII b 層出土土器
破片資料

土器、石器が出土している。土器は弥生土器であり、17回1は調査区中央部の大畦の上面及びその中から出土している。深鉢形土器である。体部上半の一部のみが残存している。口縁は平縁で、頭部からゆるやかに外反して立ち上がっている。体部は上部がわずかにふくらんでいる。口縁部は無文で体部にはL.R.繩文及び綾文が施文されている。

2~7は同一個体であると思われる。作土中より出土している。各々の破片を総合すると、口縁は平縁で、頭部から外反して立ち上がっている。体部にはふくらみがみられる。口唇部にL.R.繩文が回転押捺され、頭部に刺突による列点が施され、体部はL.R.繩文が施文されている。



第17回 VII b 層出土土器

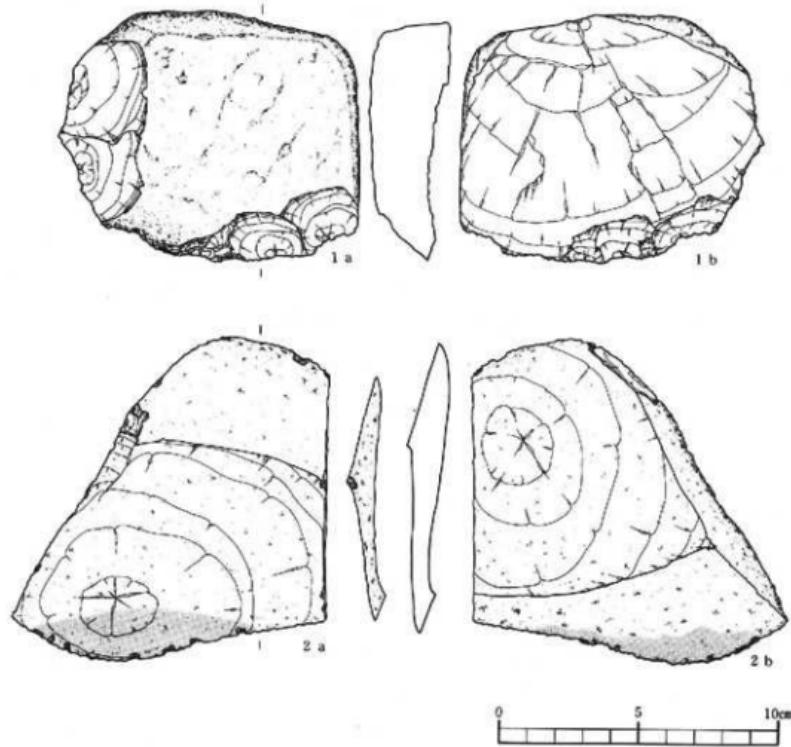


第18図 場b層咗状遺構

石器

第19図1 (図版20-7) : 石核である。素材はa面が自然面の剝片である。この剝片の剥離角は77度を測る。a面左側縁と下側縁の右側、b面下側縁の右側から剝片が剝離されている。このためa面における左側縁と下側縁は刃部状をなし、その角度は64~75度である。また下側縁には摩耗痕が認められ、刃部として機能したことが想定される。下側縁と直交する器幅は89.6mmである。石材は斑品の大きな安山岩である。

第19図2 (図版20-8) : 2次加工のある石片である。素材である石片には通常の剝片剝離



番号	器種	出土層位	石質	素材	長さ	幅	最大厚	重量	備考
1	石核	Taisho b層上部	安山岩	剝片	116.4mm	98.0mm	31.5mm	413.5g	表面下側縁に摩耗痕が認められる。
2	2次加工のある石片	Taisho b層下部	安山岩	石片	142.0mm	105.0mm	17.5mm	191.5g	表面:裏面共に上下側縁に摩耗痕が認められる。下側縁付近に先端部有り。

第19図 Taisho b層出土石器

とは異なる營力によって形成された剝離面がa b両面にある。2次加工は各側縁に部分的に認められるが石片の形態を大きく変えるものはない。このことは石片の段階で既に石器としての形態・規模を有していたことを示している。微細剝離痕は上下両側縁に認められ、下側縁付近には光沢面がある。(スクリーントーン部分)このことから下側縁を上たる刃部として機能した石器であることが考えられる。

下側縁の刃角は44~51度であり、下側縁に直交する器幅は10cmを越える。また裏面下側縁のやや内側には刃部に平行するような稜が認められ、断面は片刃状を呈しており、表面上側縁においても同様の傾向がみられる。このため石器の断面形はやや歪んだ扁平な平行四辺形を呈する。a面右側面には擦痕のようなものが認められるが明瞭ではない。またa面右側縁下部には摩耗痕がある。石材は板状節理を有する斑晶の小さな安山岩である。この石器は規模の点からはより大型であること、形態的に板状を呈すること、鋭い一側縁を上たる刃部としていること、石材に板状節理を有する安山岩を用いていることから、高沢遺跡第15次調査において出土している「大形板状安山岩製石器」^(註)として認識される。

註)

斎野裕彦編：1987「高沢遺跡第15次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第98集

VII. 考察とまとめ

1. 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、弥生土器、土師器、須恵器、土師質土器、石製品、木製品などがある。各遺構、層位毎に個々の遺物については取り上げており、ここでは比較的図示資料が多く、まとめて出土している土師器、須恵器、弥生土器についてまとめてみたい。また、^b層出土石器については、VII-(5)で既に述べているのでここでは省略する。

(1) 土師器

土師器は主に、IV・V層遺物包含層から出土している。器種としては、壺、高壺、甕、瓶、手捏ね土器があり、出土点数は最も多いが、大部分が磨滅した小破片であり、全体の器形や細部の調整まで判明する大破片や保存状態の良好な資料はほとんど見られない。それぞれの破片資料を観察したところ、成形の際にロクロを使用した痕跡が確認されるものは全く見られない。壺については内面に黒色処理が施されているものはない。底部外面に粘土を貼り付け、揚げ底風の器形にしているものがある。体部はやや丸味をもつ器形であると思われるが、口縁部については不明である。器面調整については、内外面ともに、一部にヘラミガキ、ナデ、ハケメが残存するのみであり、全体的には不明である。高壺については、脚部の破片のみしか見られないが、円錐形で、膨らみをもつものもみられる。器面調整は僅かに外面にヘラミガキ、内面に

オサエメが残存する部分が見られるのみである。また、壺については、単孔式であると思われる底部付近の破片が出土しているのみである。他の器種については、特徴的な資料はみられなかった。以上のことから、今回の調査で出土した土師器の特徴については、成形時にロクロが使用されておらず、内面に黒色処理が施されていないという点があげられる程度であり、器形的にも小破片が多く不明な点が多いが、壺については底部が揚底風で、体部が丸味をもつていていうという点があげられる。詳細については不明な点が多いが、年代的には、概ね古墳時代中期頃のものであると大きく把えておきたい。^(註1)

(2) 須恵器

須恵器は、土師器と同様にⅣ・V層遺物包含層から出土している。出土点数が少なく、全体の器形が明らかな資料は、壺身1点のみであり（第12図5）、他は全て破片資料である。脚と考えられる破片（第12図7）は口縁部の破片である可能性もある。壺身については、器形・胎土の特徴から、在地産の可能性がある。年代的には6世紀初頭から前半に位置付けられるが、^(註2)5世紀代に遡る可能性もある。

(3) 弥生土器

弥生土器は、Ⅷb層水田大畦及び作土中から出土している。大畦から出土しているものは、器形的には、口縁は平縁でゆるやかに外反しており、体部上半部が僅かにふくらむものである。文様は、体部にL R縄文及び綾絞文が施文されており、頸部から口縁部にかけてミガキが施されている。内面調整は全面がミガキである。また、作土中から40点の小破片がまとめて出土しており、出土状況、破片の特徴から同一個体のものであると考えられる。器形的には、口縁は平縁で外反し、体部にはふくらみがみられる。文様は、頸部に列点刺突文、口唇部及び体部にL R縄文が施文されており、頸部から口縁部にかけてミガキが施されている。内面調整は全面にミガキが施されている。これらの土器は、頸部の列点刺突、口唇部の縄文、器形などから樹形圓式に比定されるものであると考えられるが、頸部から口縁部にミガキが施されている点や、大畦から出土したものが、形態的に宮城県北の青木畠遺跡出土の深鉢形土器に類似しており、樹形圓式よりやや古い様相を示しているとも考えられる。しかし、資料数が少なく、体部上半部のみの資料であるため明確な判断はできない。以上より、Ⅷb層水田出土土器は、樹形圓式あるいはそれ以前に位置付けられる可能性がある。

2. 検出遺構

本遺跡においては、昭和57年度に仙台市高速鉄道関係の発掘調査が行なわれている（以下前回の調査とする）。前回の調査でのⅡ区が今回の調査区の東側およそ30mの地点に設定されている。^(註3)検出遺構は、4層が古墳時代の遺物包含層、5層上面で古墳時代の堅穴住居跡、小溝状

遺構である。今回の調査で検出された遺構のうち、IV・V層遺物包含層、VI層上面検出ピットについては、前回の調査で検出された遺物包含層及び竪穴住居跡と関連付けて考えてみたい。その他、Ⅶ層及びⅧb層検出遺構について取り上げる。

(1) 遺物包含層

今回の調査で検出された遺物包含層は、前回の調査で検出された遺物包含層と基本的に同じものであると考えられる。しかし、前回の調査では単層であり、一括土器が比較的まとまって集中的に出土する部分がみられるのに対して、今回の調査では、遺物包含層は二層に分けられ、出土した遺物は大部分が磨滅した小破片であり、遺物が集中する部分もみられないという状況であり、遺物及びその出土状況のあり方に違いがみられる。これは、前回の調査で検出された竪穴住居跡は、北側の微高地上の比較的高い部分に位置しており、これに対して遺物包含層は、南側の一段低い部分に分布しているということから、今回の調査区では、北側及び北東側の調査区外の一段高い微高地上に集落の中心部あるいは居住域が存在し、その南側の微高地斜面に遺物包含層が形成されているものと考えられる。今回の調査では、特に磨滅した小破片のみしか出土していない、ということは、遺物包含層自体でも、居住域からさらに離れた部分にあたるものであると思われる。また、その所属時期については、出土した遺物の年代から、南小泉式期にあたるものと考えられるが、前回の調査の遺物整理、報告書作成段階における検討により、より詳細に理解されるものと思われる。

(2) VI層検出遺構

前述のようにVI層上面は、前回の調査において竪穴住居跡が検出された面と同一の面と考えられるが、竪穴住居跡の南側の一段低い部分では、溝状遺構とピットが検出されている。今回の調査で検出されたピットについてもそれらと関係があるものと思われるが、わずかに3個のみであり、位置的にも散在しているという状況を示しており、組み合せ等の詳細は不明である。また、溝状の遺構については明確なものは検出されなかった。これらの遺構については、今回の調査区より東側及び北東側に主に分布するものと思われる。

(3) VII層検出遺構

Ⅶ層上面で検出された遺構は、畦畔状遺構1条のみである。水田跡の畦畔である可能性も考えられるが、下層のⅧa層が盛り上がっている部分の影響を受けていると思われる部分もある。十層自体が調査区全面に分布しており、耕作等の痕跡を示す範囲及び耕作を受けていない範囲については把えられる資料が得られなかった。また、付章に報告されているように、プラント・オバール分析の結果においても、水田耕作を行っていたことが推定されるデータは認められず、上層及び下層の状況から擬似畦畔である可能性も考えられない。以上のことより、Ⅶ層が水田跡であり、VI層上面検出遺構は畦畔である可能性はあるが詳細については不明であり、今

後、今回の調査区の周辺、特に南側の微高地から、離れた後背湿地の部分の調査が充実することによって、詳細が明らかになると思われる。

(4) Ⅳb 層検出遺構

Ⅳb層では水田跡が検出されている。大畦が2条検出されているが、それぞれの方向は、N-52°-E、E-44°-Sであり、延長するとほぼ直交するものと思われる。区画については明確に検出されてはいないが、大畦によって区画された内部は、小畦によってさらに小区画に区画されていたものであると考えられるが、小畦については、一部分が検出されたのみであり、詳細については不明である。畦畔以外の水路、水口、杭列などの施設は検出されず、水田の作土の広がりについても調査区全面に分布しており、耕作域についても不明である。この水田跡の年代については、大畦及び作土中から出土している弥生土器から考えると、樹形圓式期あるいはそれより古い時期のものである可能性が強く、樹形圓式期あるいはそれ以前であると想えておきたい。樹形圓式期以前の水田跡については、本遺跡周囲をとり囲んでいる富沢遺跡の北東部で検出されているのみであり、仙台市内において最も古い時期の水田跡であると思われる。今回の調査による発見によって泉崎浦の微高地南側まで水田域が広がっていることが確認された。しかし、耕作域については、富沢遺跡全域では確認されておらず、その範囲及び構造等について不明な点が多い。今後の調査の充実によって当該時期の水田について、耕作域あるいは構造、明確な所属時期等について検討して行かなくてはならないものと思われる。

(5) その他

本遺跡においては、昭和54年度に、微高地の東端部に近い部分で、試掘調査が行なわれ、繩文時代後期初頭に位置付けられる土塊及び土器が検出されている。しかし、その検出面は盛土の下約35cmと極めて浅い部分であり、上層部分では繩文時代後期以降の遺構及び遺物は検出されず、今回及び前回の調査結果と大きく相違している。今回の調査区では、繩文時代あるいはそれ以前の遺構及び遺物は検出されず、繩文時代あるいはそれ以前の状況については不明であり、微高地中心部での調査によって、本遺跡の繩文時代あるいはそれ以前の様相を明らかにし、周囲の後背湿地との関係を解明して行かなければならぬと思われる。

3.まとめ

(1) 本遺跡は、郡山低地西部の後背湿地中央部に西方の丘陵より東方に延びる微高地上から後背湿地にまたがって立地している。今回の調査では、微高地縁部から後背湿地にかかる部分に調査区が設定された。その結果、平安時代以降の遺構と遺物、古墳時代の遺物包含層、ピット群、古墳時代以前で弥生時代以降の畦畔状遺構、弥生時代の水田跡と遺物が検出されている。

- (2) 微高地に存在すると考えられる集落跡の中心部分は、今回の調査区の北東から北側に存在すると考えられる。
- (3) 弥生時代の水出跡は大塙が2条検出されているが、水田区画、耕作域等詳細は明らかできなかった。所属時期については樹形開式期あるいはそれ以前まで遡るものであると考えられる。
- (4) 今回の調査では縄文時代及びそれ以前の遺構と遺物は検出されなかった。

註

- 註1 仙台市教育委員会 太田昭夫氏の御教示によると、环の底部外面に粘土を貼り付けて掲げ底風にしてい るという例は、宮城県蔵王町所在の大橋遺跡出土資料中に見られ、今回の調査による出土資料についても、 大橋遺跡と同時期まで遡る可能性のあるものが混在していることも考えられる。
- 註2 仙台市教育委員会 佐藤洋氏の御教示によると、今回出土の环身については、在地産のものである可能 性が強く、関東地方の資料と比較しても、類似資料は見られないということである。また、瓢?の把手に ついては、把手部分しか残存しないが、把手の形態から朝鮮系の須恵器である可能性も考えられるという。
- 註3 発掘調査中より泉崎浦遺跡II区及びIII区の調査担当者に、調査区の層位及び出土遺物について、前回の 調査との比較から、有益な教示を受けた。

引用参考文献

- 田邊正三：「陶邑古窯跡群」（1966年）平安学園
伊東信雄：「宮城県史1」（1957年）宮城県
伊藤玄三：「日本の考古学Ⅲ・弥生時代」（1981年）河出書房新社
加藤道男：「青木畠遺跡」（1982年）宮城県教育委員会
篠原信彦・吉岡恭平・他：「仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅱ」（1988年）仙台市教育委員会
結城慎一・渡辺誠・他：「仙台平野の遺跡群V」（1986年）仙台市教育委員会
斎野裕彦・他：「宮沢」（1987年）仙台市教育委員会
渋谷孝雄・他：「年報1」（1980年）仙台市教育委員会

付章：仙台市泉崎浦遺跡土壤のプラント・オパール分析

古環境研究所 杉山 真二

1. はじめに

泉崎浦遺跡では、発掘調査によってⅩ層上面が検出され、堆積状況などから水田跡ではないかと見られていた。

この調査は、プラント・オパール分析を用いて、水田跡の確認および探査を行なったものである。以下に、調査の結果を報告する。

2. 試 料

昭和62年11月17日に現地調査を行なった。

土層はⅠ層～Ⅹ層に分層されていた。このうち下部のⅣ層～Ⅹ層について試料を採取した。

Ⅹ層は、堆積状況などから水田跡ではないかと見られていたところである。Ⅸ層、Ⅷ層は黒褐色の植物遺体層である。

試料は、容量50ccの採土管を用いて各層ごとに5～10cm間隔で採取した。

3. 分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、「プラント・オパール定量分析法（藤原：1976）」をもとに、次の手順で行なった。

- (1) 試料土の絶乾(105℃・24時間)および仮比重測定
- (2) 試料土約1gを秤量し、ガラスピーブを添加(直径約40μm、約0.02g)
※電子分析天秤により、1万分の1gの精度で秤量
- (3) 脱有機物処理(電気炉灰化法または過酸化水素法)
- (4) 超音波による分散(150W・26KHz・15分間)
- (5) 沈底法による微粒子(20μm以下)除去
- (6) 乾燥のち封入剤(オイキット)中に分散し、プレパラート作成
- (7) 検鏡・計数

同定は、機動細胞珪酸体に由来するプラント・オパール(以下、プラント・オパールと略す)をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行なった。計数は、ガラスピーブ個数が300以上になるまで行なった。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。

試料1g中のプラント・オパール個数(Sp)は、次式にしたがって求めた。

$$Sp = \{ (Gw \times a) / Sw \} \times (\beta / a)$$

ただし、 G_w は添加したガラスピーズの重量、 a はガラスピーズ 1 g 中の個数、 S_w は試料の絶乾重量、 α と β は計数されたガラスピーズおよびプラント・オバールの個数を表わしている。

植物体生産量の推定値 (B_w 、単位: $t / 10 a \cdot cm$) は、次式にしたがって求めた。

$$B_w = S_p \times A_s \times K \times 10$$

ただし、 A_s は試料の仮比重、 K は換算係数（機動細胞珪酸体 1 個あたりの植物体各部乾重）を表わしている。

これに層厚をかけて、その層で生産された植物体の総量 ($t / 10 a$) を求めた。

換算係数は、イネは赤米、ヨシ属はヨシ、タケ亜科はゴキダケ、ウシクサ族はススキ、キビ族はヒエの値を用いた。機動細胞珪酸体 1 個あたりの地上部全量（単位: $10^{-5} g$ ）は、それぞれ 2.94、6.31、0.48、1.24、12.20 である。同じく機動細胞珪酸体 1 個あたりの種実重は、イネが 1.03、ヒエが 5.54 である。

4. 分析結果

調査の主目的が水田跡の調査であるため、イネ、ヨシ属、タケ亜科、ウシクサ族（ススキなどが含まれる）、キビ族（ヒエなどが含まれる）の主要な 5 分類群について同定・定量を行ない、分析結果の数値データを表 1 に示した。

表 2 に、各層の深度や層厚および仮比重の値などとともに、イネの推定生産量を示した。

図 1 に、イネのプラント・オバールの出現状況を示した。図 2 に、堆積環境の指標となる主な分類群（イネ、ヨシ属、タケ亜科）について植物体生産量とその変遷を示した。

5. 考 察

(1) 稲作の可能性について

水田跡の探査を行なう場合、イネのプラント・オバールが試料 1 g あたりおよそ 5,000 個以上検出されたときに、稲作の行なわれた可能性が高いと判断している。また、その層にプラント・オバール密度のピークが認められれば、後代のものが上層から混入した危険性は考えにくくなり、稲作跡の可能性はより確実なものとなる。以上の判断基準にもとづいて、稲作の可能性について検討を行なった。

分析の結果、イネのプラント・オバールが検出されたのは、Ⅲa 層およびⅢb 層である。このうち、Ⅲb 層は密度が $4,900 \text{ 個/g}$ と比較的高く、明らかなピークが認められた。したがって、同層で稲作が行なわれていた可能性は高いと考えられる。Ⅲa 層は密度が 900 個/g と微量であるため、ここで稲作が行なわれていた可能性は考えにくい。

水田跡ではないかと見られていたⅣ 層では、イネのプラント・オバールは検出されなかった。

以上のことから、同地点ではⅢb層の時期に稲作が行なわれていたが、その後Ⅲa層の時期には何らかの原因で放棄されたものと推定される。

(2) 稲穀生産量の推定(表2参照)

Ⅲb層で生産された稲穀の総量を算出した結果、面積10aあたり2.7tと推定された。当時の稲穀の年間収量を面積10aあたり100kgと仮定すると、Ⅲb層で稲作が営なまれていた期間はおよそ30年間であったものと推定される。

なお、以上の値は収穫方法が穂刈りで行なわれ、稲わらがすべて土壤中に還元されたことを前提として求められている。ここで推定した稲穀の生産量ならびに稲作期間は、あくまでも目安として考えられたい。

(3) 古環境の推定(図2参照)

ネザサなどのタケア科植物は、比較的乾いた土壤条件のところに生育し、ヨシは比較的湿った土壤条件のところに生育している。このことから、両者の出現傾向を比較することによって、土層の堆積環境(乾湿)を推定することができる。

同地点ではタケア科はほとんど見られず、ヨシ属が非常に多いのが特徴である。ヨシ属は、Ⅲc層では圧倒的に優勢であるが、Ⅲb層ではイネの出現とともに著しく減少している。しかし、Ⅲ層ではヨシ層は再び激増し、これにともなってイネは見られなくなっている。

これらのことから、Ⅲc層の時期にはここはヨシの繁茂する湿地であったが、Ⅲb層で稲作が開始された時点ではヨシは人為的に淘汰されたものと推定される。その後何らかの理由で稲作が行なわれなくなり、Ⅲ層の時期には再びヨシの繁茂する湿地に移行したものと推定される。

表1 試料1gあたりのプラント・オバール個数

仙台、泉崎浦遺跡

試料名	イネ	ヨシ属	タケア科	ウシクサ族	キビ族
Ⅲ	0	31,100	10,000	3,000	0
Ⅲa	900	1,900	7,600	900	0
Ⅲb	4,900	5,900	1,900	900	0
Ⅲc	0	17,500	2,700	0	0
Ⅳ	0	8,600	7,700	0	0
X	0	4,800	8,800	0	0

表2 イネの生産量の推定

仙台、泉崎浦遺跡

層名	深さ cm	層厚 cm	P.O.数 個/g	仮比重	P.O.数 個/cc	稲わら重 t/10a·cm	稲穀重 t/10a·cm	稲穀總量 t/10a
Ⅲ	50	4	0	0.36	0	0.00	0.00	0.00
Ⅲa	54	10	900	0.74	600	0.11	0.06	0.62
Ⅲb	64	8	4,900	0.69	3,300	0.63	0.34	2.72
Ⅲc	72	14	0	0.65	0	0.00	0.00	0.00
Ⅳ	86	7	0	0.48	0	0.00	0.00	0.00
X	93	—	0	0.66	0	0.00	0.00	—

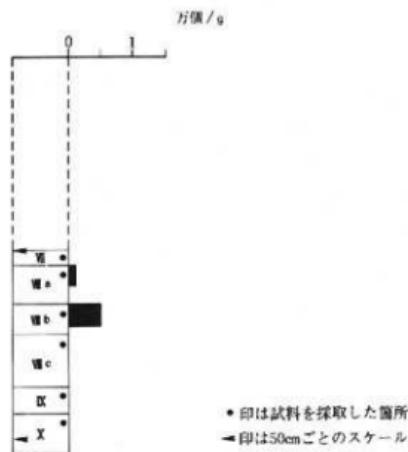


図1 イネのプラント・オバール密度

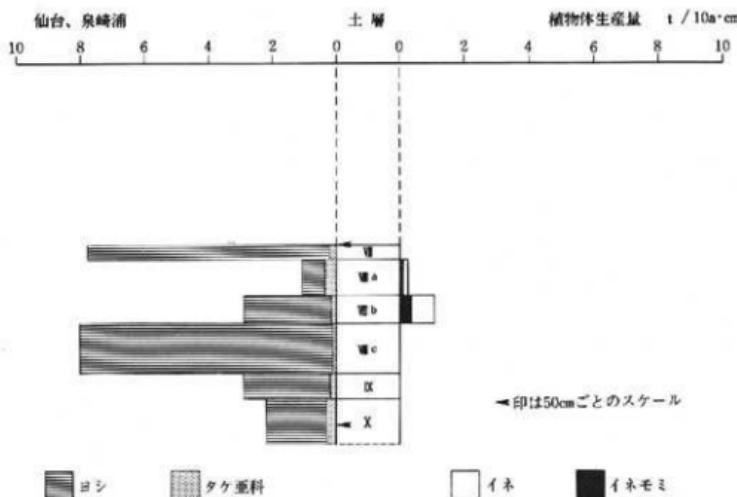


図2 おもな植物の推定生産量

写 真 図 版



図版1 泉崎浦遺跡周辺の航空写真 (昭和22年撮影)

図版2
SK-2セクション
(南→)



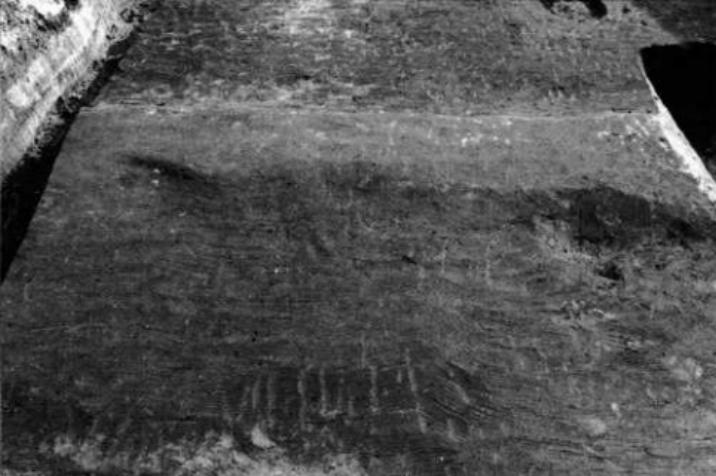
図版3
SE-1全景
(東→)



図版4
SX-1全景
(北→)



図版 5
IV層土手状連構
(西→)



図版 6
IV層上面足跡
(西→)



図版 7
IV層上面足跡
(西→)



図版8
VI層上面Pit-2
(東→)



図版9
VI層上面Pit-2
断面 (北東→)



図版10
VI層上面作業風景
(西→)



図版11
VI層上面畦畔状造構
(西→)



図版12
Vb層群
(南西→)



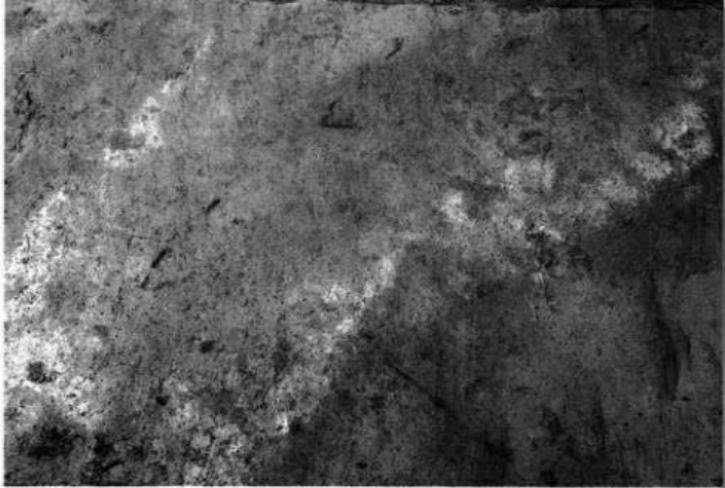
図版13
北壁中央部セクション
(南→)



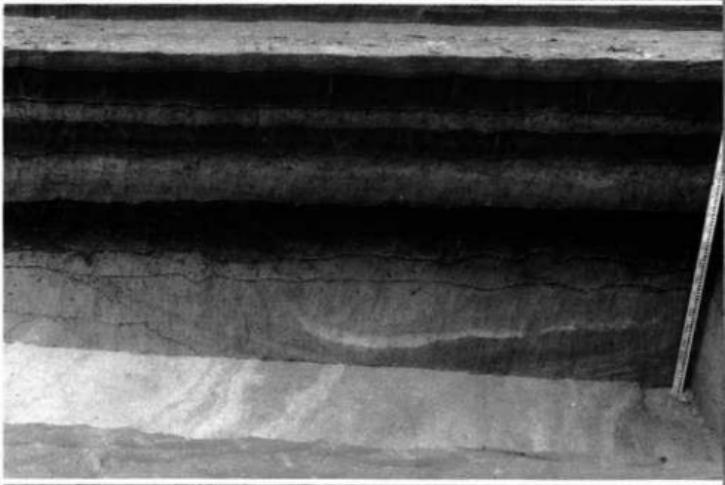
図版14
北壁東部セクション
(南→)



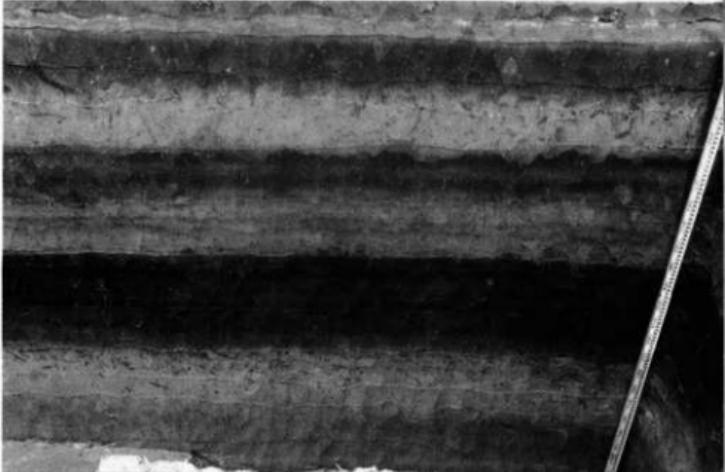
図版15
東トレンチ火山灰
検出状況
(南→)

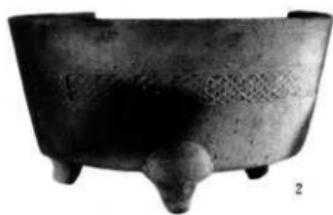


図版16
東トレンチ北壁
(南→)



図版17
西トレンチ北壁
(南→)





1. 桶 (第8圖)

2. 香炉形器 (第10圖)

3. 土師器蓋 (第12圖4)

4. 土師器環底部 (遺物包含層)

5. 須惠器脚? (第12圖7)

6. 須惠器環 (第12圖5)

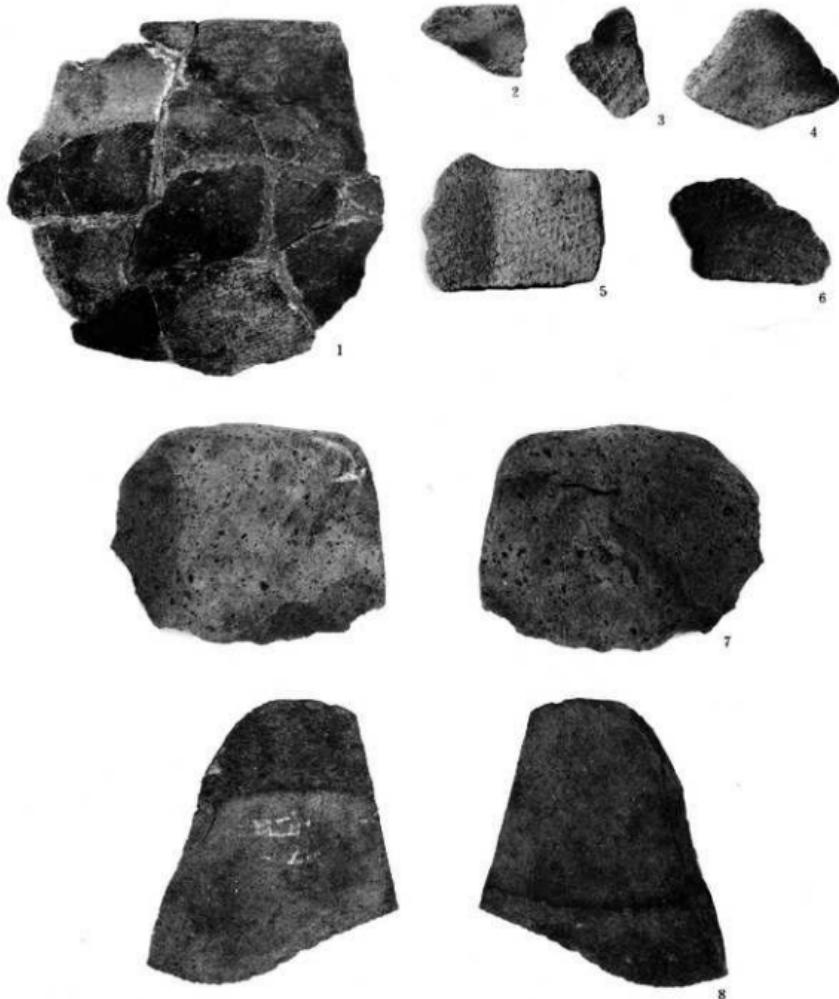
7. 須惠器瓶?把手 (第12圖6)

圖版18 出土遺物 (1)



1. 有孔円盤（第13図1）
 2. 砥石（第13図2）
 3. 4. 二次加工のある剥片
 （遺物包含層）
 5. 柱材（第15図）

図版19 出土遺物 (2)



1～6. 有生土器 (第17図1・2・4～7)

7. 石核 (第19図1)

8. 二次加工の
ある石片 (第19図2)

図版20 出土遺物 (3)

職 員 錄

文化財課		調査係		調査係	
課長	早坂春一	係長	佐藤 隆	主事	佐藤 良文
		主事	結城慎一	〃	長島 兼一
管理係	〃	木村浩二	〃	及川 格	
係長	成田時雄	篠原信彦	教諭	千葉 仁	
主任	岩沢克輔	太田昭夫	〃	松本 清一	
主事	山口 宏	佐藤 洋	主事	中宮 洋	
〃	白幡靖子	金森安孝	〃	平間 亮輔	
		佐藤甲二	〃	松本 素明	
		吉岡恭平	〃	佐藤 淳	
		小川淳一	〃	渡部 紀	
		工藤哲司	教諭	渡辺 雄二	
		〃	渡部弘美	主事	宮崎 明
		橋本光一	〃	大江美智代	
		主浜光朗	〃(併任)	工藤信一郎	
		斎野裕彦			

仙台市文化財調査報告書第119集

泉崎浦遺跡

—発掘調査報告書—

昭和63年3月

発行 仙台市教育委員会

仙台市国分町3-7-1

仙台市教育委員会文化財課

印刷 (株) 東北プリント

仙台市立町24-24 TEL 263-1166

